北海道・修学旅行特集

「探究」「体験」学びのテーマいっぱい

―環境・SDGs・共生・防災～多彩なプログラム―

新たな魅力を備えた北海道に

観光機構 道外学校の修旅誘致に注力

雄大な自然と独特の歴史文化を持つ北海道。民間研究機関の都道府県魅力度調査で16年連続1位に選ばれるなど魅力いっぱいの地域で、観光資源も多く、国内外からたくさんの人が訪れる。北海道の面積は、国土の22%を占める。道都「札幌」がある道央圏を中心に、サハリンを望む道北圏、津軽海峡を挟んで本州に接する道南圏、そして、北方領土や流氷の海に続く道東圏までと、非常に広い。

そこに全国最多の179市町村がある。それだけに地域の個性は豊かで、環境、SDGs、共生、防災などさまざまなテーマでの修学旅行が実施できる地域でもある。いま、新型コロナの影響を受けた修学旅行も、2019年前の状況にと回復しつつあり、北海道では、改めて官民一体となって、道外からの誘致拡大に向けて積極的な取り組みを進めている。

新たな魅力となる施設や取り組みが

道外からの修学旅行は、新型コロナの影響で2020年度には以前の2万6212人と7分の1に、21年度も約3分の1の7万9689人にとどまった。

しかし、修学旅行を巡っては、物価の高騰やバスのドライバー不足、オーバーツーリズム、温暖化による災害リスクなどの問題が生じるとともに、「総合的な学習（探究）の時間」の設定に伴う学校側のニーズも変化。これらに対応した受け入れが求められている。

そうした中で北海道では、16年の北海道新幹線の函館開業後も、従来から広く知られる観光資源だけでなく、新たな教育旅行学習のコンテンツとなる魅力ある施設や取り組みがたくさん生まれてきている。

20年には先住民族であるアイヌの歴史・文化の復興拠点となる民族共生象徴空間「ウポポイ」（白老町）が開園し、21年には「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界文化遺産登録が実現。

23年には日ハム球団のスタジアムを中心とする「ボールパークFヴィレッジ」（北広島市）のオープンや、大規模な半導体企業（千歳市）の立地。さらに先端技術の農業分野での拡大、宇宙産業へのチャレンジ、アドベンチャートラベルの活発化などだ。

北海道観光機構では、これらを生かしたコンテンツづくりを進め、道や関係団体と連携して、新たな魅力を加えた北海道を全国にPRし、修学旅行の誘致拡大に取り組んでいる。

充実する修旅誘致支援策

観光機構では、今年度学校の教職員の事前下見を支援する。特に来道が初めての学校の場合、受け入れ先の状況が分からず、不安があり、プランが立てづらい。

実際に現地や宿泊施設を見ることで安心して計画してもらえるよう、事前下見のサポートに力を入れている。

現地までの交通費と宿泊費を機構が負担する。

○事前学習アドバイザーの派遣

北海道での修学旅行を予定している学校が実施する事前学習の際に専門講師の派遣を行う。講師費用は機構が負担する。

○教育関係者の視察招待

道内各地の教育旅行コンテンツを実際に見てもらうため、全国の教育関係者を対象とした視察招待を行っている。交通費と宿泊費を機構が負担する。

各地の主な取り組み

こうした中で各地域では、観光機構や関係機関と連携協力し、地域の特色や強みを生かしたコンテンツ開発など教育旅行の受け入れ態勢づくりに注力。誘致拡大に向け積極的な取り組みを進めている。

各エリアの主な取り組みを紹介する。

■道央圏（石狩、後志、空知、胆振、日高地域）

人口約200万人の道都「札幌」を囲む政治経済の中心地で、各種産業や商業施設、文教施設、サービス業などが集積。

近郊には農地や海、森林が広がり、農業、酪農業、水産業のほか、大自然を生かした観光地も多いなどバラエティに富んでおり、それらの特徴を生かした多様なテーマでの学習ができる。

【自然や社会との共生を考える】

白老町＝「ウポポイ」でのアイヌ文化体験プログラムなど

【災害復旧と防災を学ぶ】

厚真町、洞爺湖町、壮瞥町＝噴火や地震災害からの復興や防災の取り組み

【再エネのまちづくりを学ぶ】

石狩市＝洋上風力発電など再エネ活用の取り組み

【温暖化と環境問題を考える】

札幌市＝SDGsの未来都市づくり

豊浦町＝養殖現場から見る海洋環境など

■道南圏（渡島、桧山地域）

北海道の最南端に位置し、古くから北海道の玄関口として開発の歴史を紡いできたエリアで、幕末や開拓以前からのさまざまな史跡や文化が集積されている。

世界文化遺産に登録された縄文遺跡群、人気アニメの聖地、日本三大夜景、広がる大自然など盛りだくさんの魅力がある。

16年には、北海道新幹線が函館まで開通し、本州からのアクセスも向上。班別学習で巡れる場所が多く、さまざまな選択肢がある。

【縄文文化や幕末の歴史を学ぶ】

函館市、松前町＝縄文遺跡や幕末史跡の探訪

【持続可能な観光地づくりを考える】

函館市、北斗市＝班別学習による観光現場の課題研究

【自然や海洋環境を学ぶ】

七飯町、鹿部町＝湖や海でのアクティビティ

■道東圏（十勝、釧路、根室、網走地域）

見渡す限りの農地と豊穣の海に面した広大なエリアで、北海道の耕地面積の22%を占める十勝平野の農業や酪農業では、先端技術の活用が進んでいる。

さらに世界自然遺産の知床半島、釧路湿原、阿寒湖、冬には流氷が押し寄せるオホーツク海など、自然環境と温暖化を考える絶好のフィールドでもある。

国際関係が注目される中、北方領土学習の問い合わせも増えている。

【先端技術の活用とSDGsを考える】

更別村、鹿追町＝スマート農業やバイオマス発電など

【宇宙産業への挑戦を学ぶ】

大樹町＝宇宙ロケット開発や打ち上げ

【北方領土問題を学ぶ】

根室市、標津町、別海町、中標津町、羅臼町＝講座や目で見る運動への参加

■道北圏（上川、留萌、宗谷地域）

日本列島の最北端に位置する雪の多いエリアで、離島もある。有数の農業、酪農地帯であるが、過疎対策が大きな課題でさまざまな取り組みを模索し、進めている。

また、ラムサール条約で登録された湿原があり、環境保全や海の環境維持にも力を入れている。

戦争で失った樺太との関係を学ぶ平和学習も可能である。

【環境保護を学ぶ】

釧路市、厚岸町＝湿原保全やCO_2対策など

【農都連携を考える】

東川町、豊富町＝農泊や農業体験など

【アイヌの歴史文化を学ぶ】

旭川市＝博物館や関係施設での交流など

◇　◇

以上、北海道の修学旅行誘致の取り組みや各エリアの状況を紹介してきた。

北海道では他の都府県に見られない豊かな自然や歴史文化に加え、いま、新たな魅力が続々と生まれてきている。

179市町村、各地域、それらを含めそれぞれの特徴や強みを生かしたコンテンツづくりを進めている。言うまでもなく、修学旅行は学校生活の一番の思い出となる行事だ。

北海道での修学旅行を楽しみ、そして学び、考え、未来への力と希望を得ていただくことを心から期待したい。

多様化する学習ニーズに応える

北海道観光機構誘致担当部長　長野　博樹さん

コロナが落ち着いて以降、明らかに修学旅行に変化が出ていることを実感しています。

学校における「総合的な学習」「総合的な探究」の時間の導入により、従来からの施設や体験に加え、より真の学びができるコンテンツを求める声が多くなっています。

石狩市で進めているGX学習はその代表例といえますが、DX、最先端産業、防災、減災、観光教育、共生などの幅広い視点での学習コンテンツが求められています。

5月に東京都の区立中学校生120人が来道しました。十勝地方で道外中学校の受け入れは初でしたが、更別村でAIを活用したスマート農業体験やスーパービレッジ構想について勉強。そのあと鹿追町の環境保存センターでSDGsやジオパークを学習、帯広畜大で学食体験などを行い、さらに、農業運動会への参加や然別湖の大自然を満喫するアクティビティも実施し、大変好評でした。

このように修学旅行は多様化しています。北海道は、それに応えるコンテンツづくりを進めています。修学旅行を通じ、「生きる力を育む」北海道で広がる未来への活力を得ていただければと思いいます。ぜひ、検討をお願いいたします。

道外学校からの声

太田鋭一さん（埼玉県さいたま市立植水中学校長）

北海道での修学旅行は4回目で、本校では定着しています。5月に北海道新幹線を利用し、2泊3日の日程で函館にまいりましたが、魅力は班別研修です。函館はコンパクトな街で、生徒が調べ歩くにも街を縦断する市電があって便利です。近代の歴史を学ぶコンテンツが豊富で、元町やベイエリアの雰囲気も非常にいい。郊外に出ると北海道らしい自然が広がっている。

生徒だけでなく保護者からの評判も高いので、今後、北海道への修学旅行は増えていくと思われます。

小川幸男さん（東京都大田区立羽田中学校長）

初めて北海道で実施しましたが、天候にも恵まれ充実した内容の修学旅行ができました。1日目は函館を見学。2日目から、各地に分かれファームスティを行いました。生徒の多くは1次産業体験が初めてで貴重な経験になり、大自然の中での活動は北海道ならではと感じました。

ファームスティ先で生徒4人が発熱。しかし、農協職員のサポートのおかげで全員揃って東京に戻ることができた。函館の美しい夜景と地元の温かい心遣い、生徒の記憶に深く残る修学旅行になったと思います。

全員で講話を聴く～たくさんの手が上がった（更別村）

湖でのカヌー体験（鹿追町）

ＪＲでの到着を出迎える（北斗市）

酪農体験を楽しんだ（八雲町）

″脱炭素″の先進地、石狩市で学ぶ

「石狩鍋」発祥の地

道都「札幌」に隣接し、北海道の母なる川・石狩川の河口に位置する石狩市。かつてサケとニシン漁でにぎわい、郷土料理「石狩鍋」発祥の地としても知られる。

このまちが、近年は脱炭素の先進地として国際会議の場で紹介されるなど、注目を集めている。

大規模掘り込み式の国際貿易港「石狩湾新港」があり、全国に先駆けた洋上風力発電所が稼働。新港の背後にある3千㌶の工業団地には、再生可能エネルギーを活用したデータセンターの立地が活発で、世界につながる新港の機能を生かした脱炭素型のまちづくりがたくましく進められている。

地産地活のまちづくり

市では、「地域でつくられた再エネを地域で活用する」という意味を持つ「地産地活」が合言葉。洋上風力発電など、集積が著しい地元産再エネを強みに、脱炭素化が求められているデータセンターを積極的に誘致している。これが持続可能な市政運営の財源確保や経済振興、地域のデジタル化につながっている。

加えて、再エネのまちづくりを生かした教育旅行の誘致も手掛ける。

全国の若い人たちに来てもらい、実際の現場を見て学び、持続可能な社会を考える、その場を提供する方針だ。

そして、国内のDX・GX人材の育成や交流人口の拡大にもつなげたいと思いは熱い。

杉並工科高校との連携

こうした中で昨年12月に行ったのが、GX・DX人材の育成を掲げる東京都立杉並工科高校との連携協定締結だ。

25年度から探究的学習の文脈も踏まえ、同校の教育旅行を継続的に受け入れる。

生徒たちに事前学習で市の歴史や課題を知ってもらい、実際の現場で洋上風力発電やデータセンター、デジタル技術を活用する地場産業を見学し、学び、考えてもらう。

国の再エネ普及に向けた制度が整備されたのが2012年。これを受けて陸上風力や太陽光、木質バイオマスなど多様な再エネ電源の集積が始まった。

市では、「地域でつくられた再エネを地域で活用する」という意味を持つ「地産地活」が合言葉。洋上風力発電など、集積が著しい地元産再エネを強みに、脱炭素化が求められているデータセンターを積極的に誘致している。これが持続可能な市政運営の財源確保や経済振興、地域のデジタル化につながっている。

加えて、再エネのまちづくりを生かした教育旅行の誘致も手掛ける。

全国の若い人たちに来てもらい、実際の現場を見て学び、持続可能な社会を考える、その場を提供する方針だ。

そして、国内のDX・GX人材の育成や交流人口の拡大にもつなげたいと思いは熱い。

杉並工科高校との連携

こうした中で昨年12月に行ったのが、GX・DX人材の育成を掲げる東京都立杉並工科高校との連携協定締結だ。

25年度から探究的学習の文脈も踏まえ、同校の教育旅行を継続的に受け入れる。

生徒たちに事前学習で市の歴史や課題を知ってもらい、実際の現場で洋上風力発電やデータセンター、デジタル技術を活用する地場産業を見学し、学び、考えてもらう。

また、地元の中学生との交流も計画している。

このたびの教育旅行を通じた交流がしっかり根付き、発展していくことが楽しみだ。

石狩市企業連携推進課長　加藤　純さんに聞く

――杉並工科高校とはどんな交流を。

11月にIT・環境科の2年生80人を受け入れます。実際の開発現場や自然保護施設などを見学し、その取り組みや課題を学んでもらいます。

地域が存続し発展していくためには、変革を起こす人材が求められています。市民の方々との交流を通じて地域に寄り添う共感力や課題を抽出する感受性などを養う、机の上で学べない機会になればと願っています。

地元一丸となって受け入れます。

――今後に向けた取り組みと期待を。

新港地域が全国の探究学習のフィールドになればと考えています。

市が進める再エネの「地産地活」による産業おこしやまちづくりの取り組みを生かし、「脱炭素」「デジタル」「地域課題」への対応をテーマとしたオーダーメイド型の教育旅行を提案することで、若い世代を呼び込み、将来的な石狩市の発展につなげたいと考えています。

杉並工科高校との交流

オーダーメイド型教育旅行を提案

大規模な洋上風力発電が展開されている

石狩市＝人口・5万6931人（5月現在）▽面積・約722平方㌔▽市の花・ハマナス▽市の鳥・カシワ▽市の木・カシワ▽市の鳥・カモメ

北海道・修学旅行特集

ウポポイ全景

ウポポイ（民族共生象徴空間）が開業5周年

～アイヌ民族の歴史・文化を学び伝える～

毎年30数万人が来場

道内外からの教育旅行で6万人超

湖からの爽やかな風につつまれて広がる民族共生象徴空間「ウポポイ」。国が先住民族であるアイヌ民族の文化復興拠点として2020年に北海道白老町ポロト湖畔に設置したナショナルセンターだ。7月で開業5周年を迎える。約10㌶の敷地に国立アイヌ民族博物館や体験交流ホール、体験学習館、工房、茅葺のチセ、野外ステージなどを整備。アイヌ民族の貴重な文化財や資料の展示、古式舞踊の上演、工芸品の製作実演など多彩な体験メニューを提供している。開業がコロナの感染拡大の時期と重なり、一時、休園するなど苦心の運営を余儀なくされた。しかし、これまで約140万人、毎年30数万人が来場。修学旅行でも道内外から6万人を超える生徒が訪れるなど、北海道の新たな名所となり、教育旅行の学習の場となっている。

（22人乗り）の導入や、土・日・祝日の参加型プログラム、夏休み期のイベントも強化した。

さらに、14時以降の入場料金の割引を実施する。

など、積極的な取り組みを進めている。

そこで、5周年を迎える「ウポポイ」の施設や体験プログラムを紹介する。

愛称「ウポポイ」

愛称の「ウポポイ」はアイヌ語で「（おおぜいで）歌うこと」を意味している。

国が2014年に拠点設置の基本方針を決め、17年から3年の工期をかけて建設。20年7月に開業し、公益財団法人アイヌ民族文化財団が管理運営を行っている。

開園は、平日が9時から18時（11～3月は17時）で、9～10月の土・日・祝日と7月中旬～8月は20時まで。休園は毎週月曜日。入場料金は、大人が1200円、高校生が600円で団体割引もある。中学生以下は無料となっている。

一昨年から新型コロナが5類に移行したのを受けて活動も本格化。

来場者がよりアイヌ文化に触れて感じ、学び、楽しんでもらえるよう、新たに弓矢やアイヌ語のインスタレーションアートなどが体験できる施設を増設。園内を低速で移動するスローモビリティ

国立アイヌ民族博物館

先住民族アイヌを主題とした日本最北の国立博物館で、アイヌ民族の貴重な文化財や資料約1万点と映像を収蔵している。アイヌ民族の視点に立った多彩な展示やイベントを通じて、来場者にアイヌ民族の歴史や文化を紹介する。

基本展示室は「私たちのことば」「私たちのくらし」「私たちの世界」「私たちのしごと」「私たちの歴史」「私たちの交流」の6つのテーマで構成し、展示件数は約800点に上る。

中央のプラザ展示からは周辺に自由に回りながら見学していく。模型や触れる展示物で歴史と文化を体験してもらうコーナーも設けた。

特別展示室では、世界の先住民族の歴史、文化に関する最新の調査・研究の成果を紹介する展覧会なども開催。

週末には研究員・学芸員による展示の解説や誰でも参加できるアイヌ語教室などのイベントも行っている。

【映像・参加イベント】

○「アイヌの歴史と文化」「世界が注目したアイヌの技」「普段着のアイヌの上映」（シアター、毎日）

○「展示解説」「講演会」「アイヌ語教室」などの特別イベント（週末など）

体験交流ホール

ユネスコ無形文化遺産に登録された古式舞踊や各地で伝承されている歌や踊りや語りの上演、ムックリ（口琴）やトンコリ（五弦琴）の演奏を行っている。

定員303人の快適なホールは、客席とステージが近く、出演者と顔の見える交流ができ、会場一体となって楽しむことができる。

【実演・映像プログラム】

○「シノッ」（踊り、遊び）、「イメル」（稲光）の上演（毎日、4～5回）

○「カムイ・ユカラ」（神謡）アニメの上映（毎日）

工房

スタッフによる木彫、刺しゅう、織物、編物の製作実演や解説、スタッフの指導を受けて製作できる体験プログラムを提供している。自分だけの特製スマホスタンドやコースターを作ってみるのも楽しい。

ムックリや、トンコリの演奏にも気軽にチャレンジしてほしい。

【ワークショップ】

○ムックリ、トンコリの演奏体験（毎日）

○木彫、刺しゅうの製作体験（毎日）

チセと野外ステージ

茅葺のチセ（家屋）5棟によるコタン（集落）を再現。季節に合わせた生業の公開も行っており、かつての生活を知ることができる。アイヌが敬うカムイ（人間の周りに存在するさまざまな生き物や事象のうち、人間にとって重要な働きをするもの、強い影響があるもの）とのつながりを紹介する紙芝居や、ビンゴで遊びながら動物や民具のアイヌ語を学ぶプログラムもあり、子供たちと一緒に参加できる。

また、コタン前にある広場の野外ステージでは、夏季限定でアイヌ文化解説や芸能などの公演を毎日5～6回開催。

目の前に広がるポロト湖の景色を眺めながら、アイヌ文化の世界に浸ってほしい。

【実演・ワークショップ】

○芸能、紙芝居、口承文芸、アイヌ語体験、衣しょう体験（チセ、毎日）

○アイヌ文化解説、芸能の上演（野外ステージ、夏季限定）

教育旅行学習プログラム

教育旅行の受け入れに力を入れて取り組んでおり、毎年、道内外の学校から6万人を超える生徒たちが来場する。

その教育旅行の学習に対応したモデルコースや体験プログラムを用意。事前に学校や旅行会社と綿密に打ち合わせながら、生徒たちの学習に応えた受け入れ態勢を確立している。

【モデルコースの例】

（2時間コース）博物館（基本展示室）見学、伝統芸能鑑賞、自由見学（3時間コース）2時間コースのほかアイヌ料理食体験がプラス（1日コース：約4・5時間）3時間コースのほかムックリ演奏体験がプラス

○旅行会社と連携し、周辺の登別、洞爺エリアを巡り、地元の人たちと交流し、多文化共生を考える学習プログラムも提供している。

教育旅行や団体客に対し、さまざまな体験プログラムを提供し、アイヌ文化の理解を深め、楽しんでもらう施設。

本館は最大280人が利用できる教室になっており、人数に応じて区切って使うことができ、ムックリの演奏やアイヌ料理実食の体験プログラムを実施している。アイヌ文化への理解を深めてもらうのが狙い。

体験学習館

開業後、別館2棟を増設しており、別館では弓矢やアイヌ語のインスタレーションアートが楽しめる。

アイヌ文化を深く知ってもらうためには、実際に触れ、体験することが大事で、体験プログラムの開発や強化に力を入れている。

【体験プログラム】

○弓矢、VR、インスタレーションアートなど（毎日）

○アイヌ料理の調理体験（平日のみ）

○アイヌ料理「オハウ」の実食（週末のみ）

■アイヌ民族と文化

アイヌ民族は独自の言語や文化、歴史を有する先住民族で、アイヌはアイヌ語で「人間」を指す言葉。

本州北部、北海道、樺太、千島列島などに住み、狩猟、漁撈（ぎょろう）、採集、農耕、周辺民族との交易を生業とし、各地にコタン（村または集落）を形成して暮らしてきた。

現在は、北海道を中心として、本州以南や、さらに海外にも暮らす人がおり、さまざまな職業に就いている。

衣服や道具、祭具に見る美しいアイヌ文様、ユカラに代表される口承文芸、カムイを敬い感謝し、ともに楽しむ歌や踊りや祈りなど、固有の世界観を伝承し発展させてきた。

開業5周年に寄せて

多文化共生社会 在り方を学んで

民族共生象徴空間「ウポポイ」運営本部長　村木美幸さん

コロナ禍だった開業当初に比べ、お客さまとスタッフによる交流のプログラムが増えています。一緒に歌ったり楽器を演奏したり弓矢を試したり、世代を問わずアイヌ文化を体感できます。

最近の教育旅行では、生徒による探究学習への取り組みがテーマになっており、「ウポポイ」でも同じ地域の登別・洞爺エリアと連携し、共生社会実現の探究学習プログラムを提供しています。

全国からの高校生の皆さんが、このプログラムで「ウポポイ」をはじめ、登別・洞爺エリアを巡り、地域の人たちとの交流やさまざまな体験をすることで、テーマである共生社会の在り方を考える気づきを得ていただくことができると考えています。事前学習、現地学習、事後学習をサポートしますので、ぜひ、ご活用ください。

また、夏休み期間には、子供も大人もみんなで楽しめる体験やものづくりワークショップを企画しております。スタッフとも交流し、アイヌ文化に触れ、感じ、楽しんでいただきたいと思っています。

園内ではワークシートを配布していますので、夏休みの自由研究にも活用いただくなど、「ウポポイ」での1日を夏の良い思い出にしてもらえればと思います。多くのお客さまの来場をお待ちしております。

伝統芸能の上演（体験交流ホール）

ムックリ（口琴）の体験（工房）

伝統料理の実食（体験学習館）

茅葺のチセ（家屋）が並ぶコタン（集落）

衣服の展示（国立アイヌ民族博物館）

北黄金貝塚（伊達市）

秋景色の地獄谷（登別市）

有珠山ロープウェイと昭和新山（壮瞥町）

北海道登別洞爺
広域観光圏協議会
（https://westiburi.jp）

世界ホタテ釣り選手権大会（豊浦町）

洞爺湖ロングラン花火大会（洞爺湖町）

工場群の夜景（室蘭市）

ウパシクマ（白老町）